

R8(2026)年 共通テスト本試『松陰快談』現代語訳

※一部、振り仮名や返り点も補足しています。

次の文章は江戸時代後期の漢学者である長野豊山（一七八三―一八三七）が表したものである。

客問レ余曰、

ある客が私に問うて言った。

「子学レ詩、唐耶、宋耶。」

「あなたは詩を学ぶにあたって、唐詩を手本としているか、あるいは、宋詩を手本としているか。」

ク ハズ ズシモ ナラ ズ ズシモ ナラ

曰、「我ニ必唐一、不ニ必宋一、

（私は）答えた。「私は必ずしも唐詩を絶対視しないし、必ずしも宋詩を絶対視しない。」

また、必ずしも唐詩や宋詩を学ばないでもない。

又不三必不ニ唐宋一。

また、必ずしも唐詩や宋詩を学ばないでもない。

ベシ ル ふひつノ これガ しゅうしなりト

可レ見、不必二字、是我ア宗旨也。」

注目したまえ、 不必の二字、 これが私の主要な見解だ。」と。

とうば いフ ルニ ヲひつトスルハ ノヲ

東坡云、「作レ詩必ニ此詩一、

蘇軾はこう言っている。「詩を作るにあたり、『このような詩でなければならない』とする人は、

さだメテ ルト あらザルヲ ニ

定知レ非ニ詩人一。」

（その人は）決して（真の）詩人ではない。」

ベシ いフ ちげんト

可レ謂ニイ知言一矣。

（これこそ、）見識のある言葉だと言っべきだ。

ひそかニみルニ の しりゅうヲ

窃視ニ世之詩流一、

私見では、世の詩人たちの潮流を見ると、

ハ こうせつヲ

不レ問ニ詩之巧拙一、

詩の上手さ・下手さを問わず、

シ おなじキニうチテ ことナルヲ ふんさうスルコトごとシ フガ

党レ同 伐レ異、 忿争 如レ狂。

同じ考えの者をひいきして、異なる考えの者を攻撃し、怒って争うのはまるで狂っているかのようだ。

これいへども ノ シムト しかラ

B 是雖ニ狭見レ使レ然、

これは見識の狭さによつてそうさせられているとはいえ、

ず またはなは夕がいナラ や

C 不ニ亦已 駭一乎。

なんと愚かなことであろうか。

リ ノきわメテ くちヲのしリテ はくせき なんくわくヲ

有下人極レ口罵ニ白石・南郭一、

言葉を尽くして新井白石や服部南郭を罵倒して、

もつテ なス ぎ シト

以為中偽詩上。

彼らの詩を「偽物の詩だ」とみなしていた人がいた。

よ ムフ みンコトヲ ノヲ

D 余請レ觀ニ其詩一。

私は、その（人自身の）詩を見せてくれるように求めた。

たツルコト いヲちんぐニシテ たダ クもちヅテ せいじヲ

立レ意陳腐、但多用ニ生字一、

（するとその詩は）主題の立て方が陳腐で、ただ見慣れない字や言葉多く用いて、

もつテおほフノミ そノせつヲ

以掩ニ其拙一。

それによつて自分の下手さを隠しているだけのものだった。

よよりテいヒテク

ハハリ ヲ

E 余因謂曰、「白石・南郭誠作ニ偽詩一、

私はそこで、こう言った。

「白石や南郭は確かに『偽物の詩』を作っており、

べしハまことニル しんしヲ

吾子誠作ニ真詩一。

あなたは確かに『本物の詩』を作っている。

しかレドモ の ハ たとへバしんがなり

然 吾子之詩、譬 真瓦也。

しかし、 あなたの詩は、たとえるなら『本物の素焼きの器物（＝価値のないもの）』だ。

にしの たとへバぎぎよくなり

二子之詩、譬 偽玉也。

（それに対して）あの二人の詩は、たとえるなら『偽物の玉（＝美しい宝石の模造品）』だ。

の あたひ はるカニ リト

ニ

真瓦之価、廻 在ニ偽玉之下一。」

本物の素焼きの器物の価値は、偽物の玉よりもはるかに下にある。」

【資料】

よおイテ ニ シ へんかうスル
余於レ詩 無所ニ偏好一。

私は詩に関して、

作風の好みが偏ることはありません。

ハ ノ の ヨ
不レ問ニ其風調之異同一、 佳者取レ之。

優れたものはそれを（優れていると）評価する。

たダせいかう せつぞくニシテ

但生硬・拙俗、

ただし、表現が未熟でかたい感じがしたり、稚拙で低俗だったりして、

ふうゑいスルニキ いんち ものハ

諷詠 無ニ韻致一者、

（その詩を）朗唱すると、気品や風情が感じられないものは、

いへども いフト の ト ル

雖レ曰ニ名人之所レ作、

名声の高い人物の作品だと言われても、

ハすなはチ ざル ラなり

我則 不レ取也。

私は（優れていると）評価しない。